つくば市の農家における屋敷の空間構成

— 接道条件と外部空間に注目して —

THE SPATIAL COMPOSITION OF FARM HOUSING
LOTS IN TSUKUBA-CITY

A notice of the conditions of around street and the spaces of outside buildings in the premises

中野 茂夫*¹, 藤川 昌樹*², 安藤 邦廣*³, 後藤 治*⁴堀江 亨*⁵, 黒坂 貴裕*⁶Shigeo NAKANO, Masaki FUJIKAWA, Kunihiro ANDO, Osamu GOTO,
Toru HORIE and Takahiro KUROSAKA

The purpose of this study is to consider the spatial composition of the farm premises. The case of this study is Tsukuba-city.

We consider that the spatial composition has a closely relation to conditions of location and a plot of buildings in the premises. Farm premises are classified 3types according to the conditions of around street. We analyzed the spatial composition of farm premises about 3types.

The conclusion of this paper is that the spatial composition of farm premises are different from how garden spaces (garden spaces are the front garden, the back garden, and the room garden) are made.

Keywords : Ibaraki, Tsukuba city, Folk house, Spatial Composition, Arrangement
茨城、つくば市、民家、空間構成、配置

1. はじめに

1.1 背景と目的

農家の屋敷内には、母屋のほかに蔵や納屋あるいは書院といったさまざまな建物が建てられている。それらは雑然と建てられているのではなく、一定のルールにしたがって配置されているに違いない。本稿は、そうした屋敷の空間構成（屋敷構え）の特性について、つくば市の農家を事例として検討するものである。

これまで民家史研究は、母屋を中心に編まれてきたといつてよい⁸¹。そこで再三指摘されているのは、近世民家が地域特有の気候風土あるいは生活習俗や生業、生産体制にもとづいて形成されたという点である⁸²。とりわけ農家における生産体制は母屋だけでなく屋敷全体で成立していたというのは論をまたない。筆者らは、とくにつぎの2つの理由から、屋敷全体を視野にいれつつ民家史研究を再構築してゆく必要があると考えている。第一は、母屋の建築形態が、敷地形状や接道条件さらには既存の建物との位置関係など、屋敷の立地条件や配置構成の影響を少なからず受けていると考えられる点である。第二は、母屋の建築様式の変化と付属屋の発達過程とが対応していると考えられる点である。もっとも顕著な例では、母屋の

土間の縮小過程と納屋の発達過程とが対応していることがあげられよう。こうした課題に対する基礎的研究として、まずは屋敷の空間構成の特性について明らかにしてゆくことこそ必要であろう。

屋敷の空間構成に関しては、建築学のみならず民俗学や地理学領域においても数多くの論考が公刊されており、建築物の配置形式から井戸や干庭、屋敷林、氏神等の位置関係にいたるまでさまざまな視点から分析がなされている⁸³。とくに黒野らの礪波平野を事例とした一連の緻密な研究では、屋敷構えと間取りとの間に対応関係があったことも指摘されている⁸⁴。だが、従来の研究で分析の対象とされてきたのは、現況ないし聞き取りが可能な比較的近い年代の農家屋敷であったといえよう。本稿では、さきにあげた課題に対する基礎的知見を得るためにも、可能なかぎり復元的考察を加えながら屋敷の空間構成の特性について検討したい⁸⁵。なお、本稿はつくば市を対象とした事例研究にすぎないが、現段階の研究状況に鑑みれば、こうした分析を積みかさねてゆくことが求められているといえよう。

このような認識から、本稿ではつくば市における農家屋敷の空間構成の特性について立地条件と外部空間の取り方に着目しつつ明ら

*¹ 筑波大学大学院環境科学研究科
准研究員・博士(都市・地域計画)

*² 筑波大学大学院システム情報工学研究科
助教授・博士(工学)

*³ 筑波大学大学院人間総合科学研究科 教授・工博

*⁴ 工学院大学工学部建築都市デザイン学科
助教授・博士(工学)

*⁵ 日本大学生物資源科学部森林資源学科 助教授・博士(工学)

*⁶ 筑波大学大学院人間総合科学研究科
博士特別研究員・博士(デザイン学)

Research Assoc., Master's Program in Environmental Sciences, Univ. Tsukuba,
Ph. D. in Urban and Regional Planning

Assoc. Prof., Graduate School of Systems and Information Engineering, Univ.
Tsukuba, Dr. Eng.

Prof., Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Univ. Tsukuba, Dr. Eng.
Assoc. Prof., Dept. of Design in Architecture and Urbanism Faculty of Engineering
Kogakuin Univ., Dr. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Forest Science of Resources, College of Bioresource, Nihon
Univ., Dr. Eng.

Researcher, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Univ. Tsukuba,
Dr. Des.

した後、接道条件による3タイプそれぞれについてこの4類型にそくして屋敷の空間構成の特性について探ってゆくことにしよう。

2. つくば市の農家屋敷における建築物

つくば市の農家屋敷にはどのような建築物が建てられているのかについてまとめたのが表1である。

母屋：まず母屋についてみると、その建設位置がさきに設定した類型とほぼ対応していることが解る。敷地の裏の空間を活用していない類型Ⅰ・類型Ⅳの場合には、敷地の北側に母屋を建設しその前面に広い空間を取っている。それに対し、裏の敷地を活用している類型Ⅱならびに類型Ⅲの場合には、敷地の中央に母屋を建設し、その裏側に広い空間を取っているのである。なお、③背面タイプの場合には、類型Ⅱであっても敷地の北側に母屋を建設している。これは背面タイプ特有の裏の空間の取り方に理由がある。この点については後述しよう。

つぎに建設頻度の高い付属屋について、(1)門、(2)蔵(倉)、(3)納屋、(4)小屋等の順にみてゆこう。

(1)門：江戸時代の農村集落における表門は、村役人または名字帯刀の許された家のみ公許されるものであった。近代にはいつてからもう少し広い範囲で建てられるようになり、調査対象のうち表門を構える農家は36件にのぼっている。それらの形式についてみると、高麗門や冠木門などの例がいくつかみられるものの、おもに長屋門と薬医門が建てられていることが解る。

もう一つ、ここで注目しておきたいのは塀重門である。塀重門は、敷地内に静的な空間をつくるために設けられる囲いの入り口に設置される門である。したがって塀重門の建てられている民家は、類型ⅢないしⅣに属することになる。この囲われた静的な空間に面して書院が建設されている例も多い(表1のトーン部分参照)。

(2)蔵(倉)：つくば市域には、土蔵造の蔵と真壁造の蔵がともに

建てられている²⁹。どちらも穀倉や文庫蔵などに用いられており、形態と用途が対応しているわけではない³⁰。しかし表1から土蔵造の蔵は屋敷の表と裏の両方に建てられており、真壁造の蔵はほとんどが屋敷の表側に建設されているといえよう³¹。

(3)納屋：つくば地域の農家では、納屋のことを「マデヤ」とか「ナガヤ」などと呼ぶ³²。これらは、ほかの地域の納屋とは少し趣を異にしている。そのもっとも特徴的なところは、通常の納屋としての機能のほかに、作業場として利用できる深い庇を有している点、建物の一隅に貯蔵用の倉を内蔵している点にある³³。まさに稲作農業において不可欠な機能を備えた建築物といつてよい。表1からほとんどが屋敷の表側に建設されていることが確認されるのだが、このことは表の空間が稲作の作業場として活用されていたことを示していよう。

(4)小屋等：表1から、農家屋敷には木小屋、肥料小屋(灰小屋)、煙草乾燥小屋³⁴、各種畜舎など、農業に関係するさまざまな付属屋が数多く建てられていることが解る。屋敷の裏には、木小屋や物置、井戸などが多く建設されている。農家における稲作以外の雑多な作業がここでおこなわれていたことが窺われよう。また近年には納屋と車庫が併設された建物も建てられるようになっている。これは、農業機械の導入とともに、屋敷内の建築物も変化してきていることが端的にあらわれている例といえよう。

ついで、接道条件ごとの3タイプそれぞれについて、これら建築物がどのように配置され、農家屋敷の外部空間は構成されているのかについてみてゆこう。

3. 前面タイプの農家における屋敷配置と空間構成

図4は対象屋敷の規模・形状をみるために、敷地の東西と南北の距離を計測し、各タイプ・類型ごとにプロットしたものである。図4から、①前面タイプの農家の場合、屋敷の規模や形状は多様である

図3 No.19邸現況配置図 (1/1000)

図4 対象農家の敷地規模・形態

が、南北に細長い敷地のものが比較的多いことが解る。そして、おおむね敷地規模と類型は対応しており、敷地規模の大きさに比例して屋敷の外部空間は、表と裏さらに静的な空間とに分離してゆくと判断できる。なお、類型Ⅳに属するNa24とNa47については、敷地の制約条件から裏の空間を活用することのできなかった例外的な事例として位置づけることができる²¹⁵。ここでは、こうした特殊な立地条件によって屋敷の空間構成は左右されることを指摘するにとどめたい。

3-1. ①前面タイプ-類型Ⅰの諸特徴 (①-類型Ⅰ)

①-類型Ⅰの特徴は、敷地の北側部分に母屋を南面させて建設し、その前面にできるだけ広い空間を確保している点にある。そして表の空間にさまざまな付属屋を建て、農家の庭に必要とされるあらゆる機能を持たせている。①-類型Ⅰはもっとも標準的な農家の空間構成である。

具体例として、明治21年に作成された家相図が残されているNa49を取り上げてみよう(図5・6)。Na49の母屋(19世紀前半築)は敷地のもっとも奥まった部分に配置され、若干東にふれているものの南側に向けて建てられている。そしてその前面にできるだけ広い空間を確保するために、付属屋を敷地の周縁部分に配置している。聞き取り調査によると「クラ(米蔵)」「コヤシコヤ」ともに大正年間に建てられたという。また現在、「ハナレ」(昭和62年築)の建つ位置には「ナガヤ」と呼ばれる納屋が建てられていたという。このことは家相図と現況配置図との比較からも確認される。当屋敷は遅くとも大正年間までにかたちづけられた空間構成のまま現在に至っているといえよう。

3-2. 前面タイプにおける類型Ⅱの諸特徴 (①-類型Ⅱ)

①-類型Ⅱの場合、細長い敷地の屋敷地が多く、その中央部に母屋を配置し、外部空間を表と裏に分けて活用しているところに特徴がある。典型的な事例としてNa15を取り上げてみよう(図7)。

Na15では屋敷の入口に薬医門を構え、そこから母屋まで前面タイプ特有の直線的なアプローチを取っている。母屋を細長い敷地のほぼ中央に配置し、その表側と裏側の機能を分離させている。表の空間には納屋と肥料小屋が建てられており、稲作用の空間として機能していることが解る。それに対し、裏の空間には家畜小屋・タバコ乾燥小屋などが設けられており、稲作以外の副業的な農作業場とし

て機能していることが解る。このようにして細長い敷地のなかに性格の異なる二つの作業空間を生み出しているといえよう。

3-3. 前面タイプにおける類型Ⅲの諸特徴 (①-類型Ⅲ)

①-類型Ⅲの場合、母屋の前面にアプローチが設けられるため、表の空間は人の往来も多く、煩雑な空間となる場合が多い。そこで座敷周りに囲い装置を設置し、わざわざ静的な空間を設けているところに特徴がある。①-類型Ⅲに該当するのは、代官による巡検などとりわけ接客空間を必要とした名主もしくはそれと同等の家格を有する名家がほとんどである。したがってこの類型に属する屋敷は、いうまでもなく巨大な敷地面積のものばかりであり、そこには数多くの付属屋が建設されている(表1・図4)。ついで①-類型Ⅲの具体例としてNa19を取りあげよう。同家には明治25年に作成された銅版画が残されているから、それと現状とを比較しながら検討することができる(図3・図8)²¹⁶。

Na19は屋敷の入口に高麗門という格式の高い門を構えている。母屋は表門から直進してそのまま土間に入る位置に建てられている。母屋と高麗門はともに天明年間(1781-88)に建てられたと推定されるから、互いがセットで配置されていると判断して差し支えないだろう。とすれば、このことは母屋が建設当初から屋敷内の配置関係に配慮しつつ建てられていたことも示唆していよう。

母屋の表側には広大な表庭がひろがっている。もちろん、この表の空間は他の多くの農家と同じように農作業用に使われている。だが、この表の空間の機能はそれだけにとどまらない。かつて名主をつとめたという当家は、集落における公的な役割も担っていたと考えられる。それを裏づけるように母屋は「御助け普請」として建てられ、表庭に面して領主や代官を迎えるための式台も取り付けられているのである。つまり、この表庭は一種の公共空間としての機能も果たしていたといえよう。

したがって、この煩雑な表の空間と一線を画す静的な空間を設ける必要があったのであろう²¹⁷。母屋の東側に塀重門と塀によって囲われた座敷庭が設けられており、ここには落ち着いた空間を楽しむための書院も併設されている²¹⁸。この静的な空間は銅版画にも描かれており、遅くとも明治25年以前に設けられていたことが解る。

それに対し、母屋の裏側には土蔵や木小屋など家財・物資を保管するための建物が配置されている。銅版画をみると、かつてはその

図5 Na49邸の現況配置図 (1/1000)

図6 Na49邸家相図
・当院所蔵の明治24年家相図より筆者が作成。

図7 Na15邸の現況配置図 (1/1000)

図8 Na19邸銅版画 (明治25年)
茨城県立歴史館所蔵『大日本博覧図』(精行舎、1892)より作成。

奥にも何らかの建物が建てられていたことが確認される。当家は近世に醤油業を営んでいたというから、それらは醸造蔵なのではないかと推測される。とすれば、当家の裏の空間は工場制手工業の工場としても機能していたといえよう。

4. 側面タイプの農家における屋敷配置と空間構成

②側面タイプの民家の場合、接道条件の特性から間口を広く取ることが難しく(図1)、南北に細長い敷地のものはほとんどない(図4)。そして、正方形もしくは東西に細長い短冊型の敷地のものが多いところに特徴がある。したがって母屋を南面させ、且つその表側に一定規模の農作業場を確保するためには、母屋を敷地のもっとも北側に配置せざるを得ない。つまり、②側面タイプの場合、裏の空間があまり発達しないという特徴を有しているのである。したがって②側面タイプの農家は基本的には類型Ⅰもしくは類型Ⅳのいずれかに属することになる。

4-1. 側面タイプにおける類型Ⅰの諸特徴(②-類型Ⅰ)

②-類型Ⅰは、先にみた①-類型Ⅰと比較して、接する道路から母屋までのアプローチの取り方こそ違うものの、母屋を敷地の北側に建ててその前面にもっとも広い空間を確保している点では共通している。具体例として「家地相測量百分之壱製図(大正13年11月1日調)」という家相図が残されているNo56を取り上げよう(図9・10)。

No56の母屋は接する道路と棟が直交するように建てられ、②側面タイプ特有のアプローチが取られている。No56でも母屋は敷地のできるだけ北側に配置し、その前面に広い空間を確保している。そしてそこに納屋・作業場・乾燥小屋・ビニルハウスなどを建設し、農

作業空間として活用している。

ところで、その付属屋について家相図と現状配置図を比べてみると、旧厩舎が煙草の乾燥小屋に、倉庫がハナレに、肥料舎がビニルハウスに建て替えられていることが解る。納屋も位置こそ変わっていないものの車庫を兼用したものに建てかえられ、あらたに作業場も設置されている。ここには農業の変化とともに建て替えが進行してゆく様子が窺える。同時に、建て替えが部分的に進行しても、外部空間の構成にはあまり影響を与えないことを示唆していよう。

4-2. 側面タイプにおける類型Ⅳの諸特徴(②-類型Ⅳ)

②-類型Ⅳの場合、①-類型Ⅲのように、塀で囲った静的な空間を設けている事例はあまりない。その理由は、そのほとんどが接する主道路に近い方に土間を、その反対側の奥まった方に座敷・書院を設けているため、屋敷内の動線が奥まった部分までのびることは少なかったことにある。したがって植栽や生け垣、石垣、池などを巧みに配置することで静的な空間をつくり出すことは比較的容易であったと考えられる。実際、わざわざ囲い装置や別棟の書院を設けなくとも、生け垣や植栽のみで座敷まわりに静的な空間をつくり出すことに成功している例は数多く見受けられる。逆にいえば、建築的特徴から②-類型Ⅰと②-類型Ⅳを明確に分類することはできないのである。そしてそのことは、側面タイプの特徴を示しているともいえよう。ついで②-類型Ⅳの具体例としてNo55を取りあげてみよう(図11)。

No55では入り口に長屋門を構え、側面タイプ特有のアプローチをへて母屋に至る。母屋は敷地のもっとも北側に建てられており、その裏側はイドヤがある程度でほとんど活用されていないことが解

図9 No56邸現況配置図(1/1000)

図10 No56邸家相図(大正13年11月1日)

図12 NoA邸現況配置図(1/1000)

図11 No55邸現況配置図(1/1000)

図13 No38邸現況配置図(1/1000)

る。このように母屋を配置したこと、さらには付属屋を敷地の外縁部に配置したことによって、表の空間をできるだけ広くとっている。いっぽう書院の建つ西側（接する道路の反対側）では、囲い装置を設けるのではなく、植栽や池を用いることによって静かな落ち着いた空間を創出することに成功している。

5. 背面タイプの農家における屋敷配置と空間構成

③背面タイプの場合、東西をはしる主要道路にそって構成される街村状集落に存在しているものが多く¹⁹⁾、そのほとんどが南北に細長い短冊形の敷地形状をしている（図4）。そして、図1に示すように、接する道路から母屋まで迂回するアプローチがとられることになる。したがって母屋の裏側の空間を広くとると、当然、接する道路から母屋までの行き来が不便になる。このため母屋をできるだけ北側に建てる傾向がつよく、その裏側の空間が活用されることはほとんどない。また、敷地面積の広い農家では細長い空間を有効活用するために屋敷の中央に付属屋を建て、その裏側の空間と表の空間を分離させているところに③背面タイプ特有の特徴がある。なお、本調査では静的な空間を有する③-類型Ⅲの存在を確認することはできなかったが、ここではその存在の可能性を指摘しておきたい。

5-1. 背面タイプにおける類型Ⅰの諸特徴（③-類型Ⅰ）

③-類型Ⅰの場合、アプローチこそ背面タイプ特有のものであるが、母屋をできるだけ北側に建設し、その前面の表の空間に農家の庭として必要なすべての機能をもたせている点では①-類型Ⅰおよび②-類型Ⅰと共通している。その特性については、NaAに端的に表れている通りである（図12）。

5-2. 背面タイプにおける類型Ⅱの諸特徴（③-類型Ⅱ）

③-類型Ⅱの場合、①-類型Ⅱ・Ⅲが母屋の裏側を活用していたのとは異なり、屋敷の中央に付属屋を建て、その裏側の空間を活用している点に特徴がある。具体例としてNa38を取りあげてみよう（図13）。

街村状集落の主要道路の南側に屋敷を構えるNa38は、母屋を南面させるために敷地の西側に細い脇道を設け、背面タイプ特有の母屋を迂回するアプローチをとっている。母屋は短冊型の敷地の北側に建てられており、その裏側（北側）の空間はほとんど活用されていない。それに対し、母屋の表の空間は農作業場あるいは接客の場として機能している。そして、この表の空間の境界部分（屋敷の中央部分）に「クラ」「モノオキ」を配置し、その南側の空間とは一線を

画していることが図13から容易に判断される。

そしてその付属屋の裏側（南側）の空間は、畑として利用されている点、キゴヤを配置するなど雑多な作業場に使われている点、背後（南側）に屋敷林が植えられている点など、水回りを除けば①-類型Ⅱ・Ⅲの裏の空間と同様の使われ方をしていると判断される。このように付属屋を巧みに配置することによって表と裏の空間を分離させ、細長い空間を有効活用しているといえよう。これはNa37でも共通して確認された特徴である。

6. おわりに

ここまで農家屋敷の空間構成について、接道条件に対応した3タイプそれぞれについて、外部空間の取り方に着目しながら検討してきた。つくば市の農家を対象とした事例研究にすぎないが、つぎのような特性を指摘できよう（図14）。

1) 表空間のみを活用する類型Ⅰは、いずれのタイプにおいても存在しており、農家のもっとも典型的な屋敷構えであると位置づけることができよう。そして、①前面タイプで確認されたように、屋敷の空間構成は敷地規模とおおむね対応しており、表の空間のみの類型Ⅰ、表と裏の空間に分離した類型Ⅱ、表と裏さらに静的な空間に分かれる類型Ⅲというように、外部空間を分節化させることによって屋敷の有効活用がはかられているのである。

2) もちろん接道条件によって屋敷のもつ性格も異なるから、②側面タイプでは裏の空間が発達することはあまりないし、③背面タイプでは敷地の中央に付属屋を設け、その裏の空間を活用するという特有の分節化が展開されることを指摘し得る。

そして（1）表の空間には、その周辺部に納屋（マデヤ）、クラ（真壁造）、肥料小屋など農作業に必要な建物が建てられている。それに対し、（2）裏の空間には、木小屋や畜舎、物置、井戸などが建てられており、稲作以外の雑多な作業場として使用されている。また家財を収納する土蔵も多く建てられている。いっぽう（3）静的な空間には、別棟の座敷である書院が建てられる事例が数多く確認された。とくに①前面タイプでは塀重門と塀によってわざわざ囲われた空間がつけられていることが確認された。

こうした農家屋敷における外部空間の分節化が、いつごろ成立したのかについて明確に示す史料はみつからない。しかし、つくば地域の屋敷の様子について描かれたもっとも古い史料である銅版画6点から、遅くとも明治25年までに外部空間の分節化がすでに定着していたことが確認される（前掲図8参照）²⁰⁾。そして、こうした屋敷構えが、幾度とない建て替えを経験しながらも、現在まで多くの農家で継承されてきていることを指摘しておきたい。同時に、古民家の保存だけでなく、屋敷構えの保全もこれからは求められるだろう。

一般に、農家屋敷は地域によってさまざまな特色を有している。したがって本稿で確認された茨城県南地域における農家屋敷の空間構成の特性がどの程度敷衍し得るのかについて他地域の事例と比較しつつ検証してゆく作業が必要であろう。そしてそれをふまえ、農家の生産体制が屋敷全体で成立していたという認識から屋敷内の建築について再検討し、民家史研究にあらたな知見を加えてゆくことこそ今度の大きな課題として指摘できよう。

図14 外部空間の分節化概念図

【謝辞】

本研究の実施にあたって、調査の機会を与えてくださったつくば市教育委員会、調査対象農家の方々、ならびに調査に関し多大なご教授をくださった斎藤茂、田中文男氏には大変お世話になった。また配置図の作成にあたって多くの大学院生・学部生の協力を得ている。記して感謝の意を表する。

【註】

- 1) 日本民家史研究はすでに分厚い蓄積があるが、ほとんどが主屋を中心にして分析がおこなわれている。ここでは著名な今和次郎著『日本の民家 増訂版』（相模書房、1974）、『日本の民家1-8』（学習研究社、1980-81）をあげるにとどめたい。また膨大な数の市史や報告書でも取り上げられており、その一部については『日本の民家調査報告書集成1-16』（1998-1999）にまとめられている。
- 2) 例えば、後藤治『建築学の基礎6 日本建築史』（共立出版社、2003.7）pp.157-163など。
- 3) 屋敷の空間構成に関する研究は膨大な数にのぼっており、ここですべてを取り上げるわけにはいかない。代表的なものとして川島宙次『減びゆく民家-屋敷まわり・形式-』（主婦と生活社、1976）、杉本尚次『日本民家の研究』（ミネルヴァ書房、1969）等があげられる。また茨城県の農家屋敷を対象としたものに今瀬文也『茨城の屋敷と屋敷林』（『関東地方の住まい習俗』[明玄書房、pp.151-172、1984]）、清水博之『屋敷と屋敷林』（一色文彦・今瀬文也編『ふるさと住まい探訪 茨城の民家1 農家編』[茨城新聞社、pp.105-114、1992]）等がある。
- 4) 例えば、黒野弘靖・菊地成朋『村落と屋敷の対応関係からみた散村の構成原理-瀨波散居村における居住特性の分析その2-』（『日本建築学会計画系論文集』507、pp.151-155、1998.5）、同『街路村における街路と水路の中心性と屋敷構えとの関係-瀨波散居村における居住特性の分析その4-』（『日本建築学会計画系論文集』537、pp.165-170、2000.11）など。
- 5) 史料の制約などから屋敷地が構成されてゆく様相を通時的に理解することはきわめて困難であるため、ここでの分析は現況の屋敷配置を対象にせざるを得ない。しかし過去の屋敷地の構成を知り得る史料（銅版画・家相図など）をできるだけ使用し、屋敷地の形成過程をみてゆくことにする。
- 6) その成果は『つくばの民家-つくば市古民家調査報告書-』（つくば市教育委員会、2002.3）および『つくば市古民家調査報告書-その1~3-』（つくば市教育委員会、1999.3-2001.3）にまとめられている。本論文に関係する詳細な図面については報告書を参照されたい。またその成果の一部は筆者ら『つくば市における民家（農家）の編年』（『日本建築学会計画系論文集』570、pp.95-101、2003.8）において発表している。
- 7) 拙稿『つくば市の集落空間と屋敷地の構成-大村・金田村・洞下村を事例に-』（『日本建築学会計画系論文集』578、pp.139-145、2004.4）。
- 8) (1)(2)の建物の表と裏という概念は、しばしば屋敷構えに関する研究で使用されているものである。通常、民家の庭はさまざまな活動に対して開かれており、(1)(2)はともに動的な空間であるといえる。しかし座敷まわりでは、そうした動的な空間とあきらかに一線を画す、静的な空間をあえて設けている屋敷も多い。本論文では、こうした認識から(3)を定義した。
- 9) つくば地域には、このほかに板倉・大谷石を用いた石蔵が建てられているが、本調査対象にはほとんど存在しなかったため、ここではこうした形式の蔵が筑波地方で散見されることを指摘するにとどめたい。
- 10) 土蔵造のものは「ドソウ」、真壁造のものは「クラ」というように建築の形式と名称はほぼ対応していることが確認された。
- 11) 土蔵造の蔵が機能を重視した建築物であるのに対し、真壁造の蔵は外観に配慮した構造であることも関係があるのではないかと考えられる。
- 12) 「マデヤ」は、おそらく利根川沿いの農家で納屋の総称として用いられている「マデヤ」の音がにごったもので、筑波近辺特有の呼称であろう。一方の「ナガヤ」は細長い形からそう呼ばれるようになったという。
- 13) 安藤邦廣・黒坂貴裕・沖元太一『働く建築再発見5』（pp.103-107『comfort』41、株式会社建築資料研究社、2000.4）に詳しい。
- 14) 黒坂貴裕・安藤邦廣『茨城県におけるタバコ乾燥小屋の構法と成立過程に関する研究』（『日本建築学会計画系論文集』554、pp.167-174、2002.4）に詳しい。
- 15) 実測調査において、Na24は道路・隣家に囲まれており、Na47は背後に山が迫っていることを確認した。
- 16) この銅版画は、全国各地の名家を紹介する目的で作成されたと考えられる『大日本博覧図』（精行舎、1892）に収載されたもので、その精度はきわめて高い。同図には建築的な特徴までもが精巧に表現されており、ここでこの分析に使用するにあたってなんら差し支えないと判断される。
- 17) 高麗門の隣に建てられた長屋には、かつて当家ではたらく多くの小作人を住まわせていたものと推測される。現在よりもはるかに多くの労働力が農作業場に集積していたと考えられる。
- 18) 現存する書院は大正13年築のものである。しかし銅版画からそれ以前にも書院が建てられていたことが解る。
- 19) 前掲『つくば市の集落空間と屋敷地の構成』、前掲『つくばの民家-つくば市古民家調査報告書-』参照。
- 20) 前掲『大日本博覧図』収載の銅版画6点。いずれも表と裏、静的空間に分節化されていることが確認される。こうした屋敷構えは長い年月をへてつくられてゆくものであるし、定着するにも一定の年月を要するから、つくば地域における農家屋敷の外部空間の分節化は、少なくとも江戸末期には遡るものと推測される。格式高い書院座敷や鍵座敷、別棟の書院の成立過程とも対応している可能性もあるので、今後、それらの建築年代と塀重門・塀の建築年代について対照させつつ、分析をおこなう必要がある。

(2003年9月30日原稿受理、2004年5月18日採用決定)